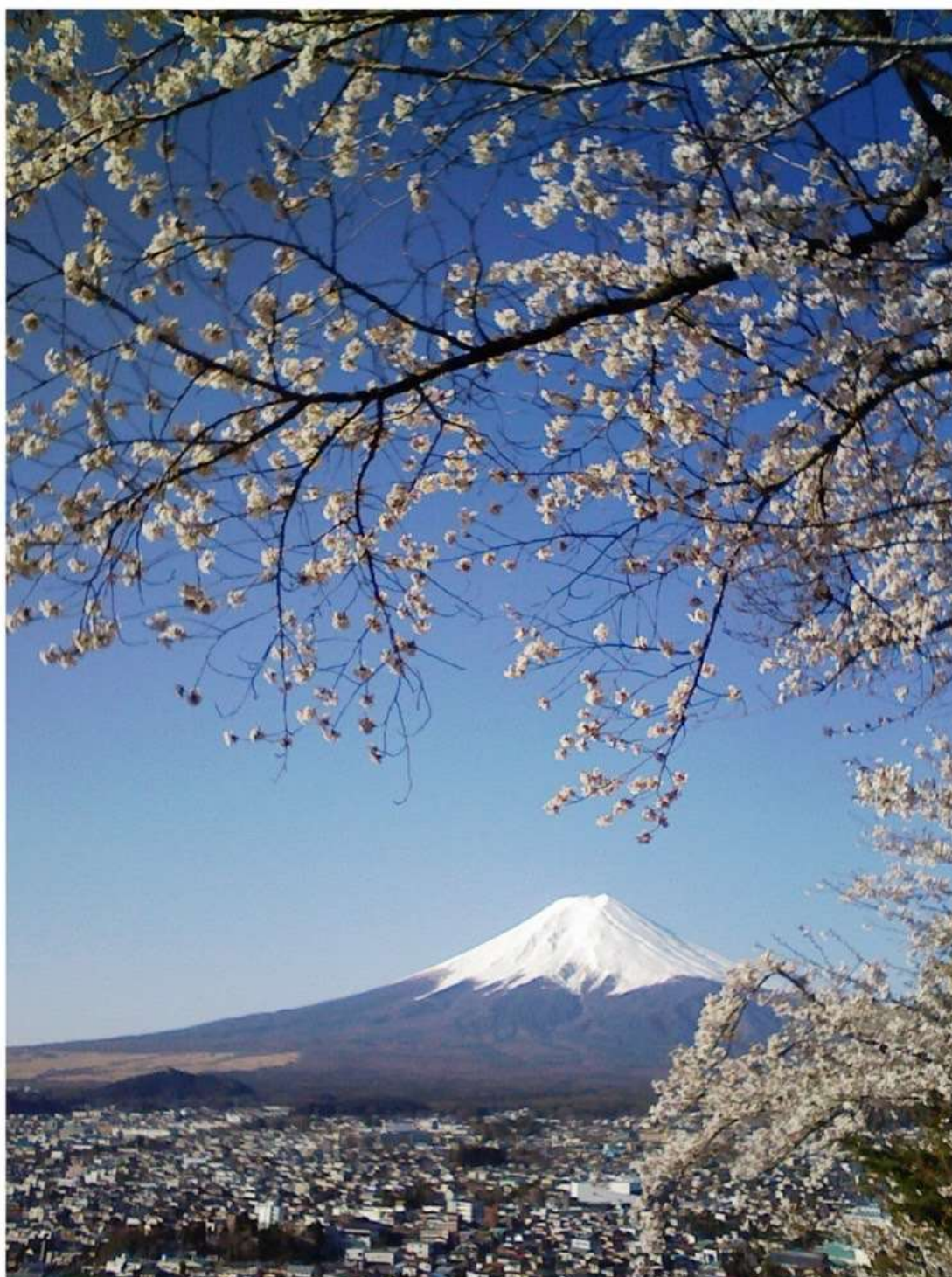


おとずれ発行500号記念特集

「おとずれ」に見る

歴代主任司祭寄稿録（抄録）



2024年4月

カトリック富士吉田教会

おとずれ発行500号記念特集
「おとずれ」に見る歴代主任司祭寄稿録(抄録)

本教会は、1953(昭和28年)年に創設され、昨年70年となりました。

教会報は当初「富士吉田カトリック教会月報」と称して発行。1981(昭和56)年2月、「おとずれ」と改称し第1号の発行としました。本年4月通巻500号となりました。

なお、「おとずれ」と改称する以前の様子は、「おとずれ前史」として、後段で詳しく述べます。

本特集号は、これを記念し、本教会初代主任司祭ヨゼフ・ロミティ神父(1953-1963年)、二代目ルイジ・ソレッタ神父(1963-1972年)に続いて、三代目の主任司祭ブイルジニオ・チェリツァ神父、以後9名の着任(ほかに助任6名)があり、折々に主任司祭として「おとずれ」に寄稿されている文章(巻頭文など)を抜粋し、掲載しました。

時を経た今、それら寄稿記事を年代ごと集約し、当時の教会活動、関係誌、写真などその時代背景の一端をも含め編集し、通巻500号へのとりまとめをしました。

初代主任司祭 ヨゼフ・ロミティ神父(1953－1963年)

1953(昭和28)年、山梨県がミラノ外国宣教会に委任され、〈中略〉スプリリオ師が甲府教会、ロミティ師とチェリツァ師が富士吉田教会にと、相次いで会の宣教師を山梨地区に派遣している。

〈以上 1988年5月刊 横浜教区設立50周年記念誌より転載〉

1953年9月18日午後4時頃初めて、富士吉田駅に到着しました。誰も私を待っていませんでした。教会を建てるために購入された家と土地は駅からかなり遠く離れていてその場所がわからなかったため、タクシーで行き、無事に着きました。主任司祭として送られましたが、信者は一人もいませんでした。

一週間後、教会のことを周囲の人々に知らせるために、5キロ程離れたアメリカの軍隊のキャンプの兵隊の協力を得て、屋根の上に高い十字架を建てました。それから2年に20人位受洗し、求道



御師の家を借りた最初の富士吉田教会

者も増え、また日曜学校の子どもたちが幾人も来ていました。着任当初から土地の形状が教会の要求に満たず、教育施設も共に造りたいと思っていましたので、適当な土地を探し始めました。少し時間がかかりましたが1954(昭和29)年4月30日に購入の契約を結び、翌年8月17日に新しい建物に移りました。

〈以上「この地に50年富士吉田カトリック教会」記念誌(2003年)より転載〉



建設中の御聖堂とロミティ神父

1961(昭和36)年4月1日ごろ家庭環境に恵まれないうちを児童相談所を通して受け入れる山中星美ホームが発足した。暖かな家庭的雰囲気と富士山麓の素晴らしい環境の中で、キリスト教的精神の神を敬い人を愛する心を育て、心身の健全な成長を授けたい願いからである。

〈以上 1988年5月刊 横浜教区設立50周年記念誌より転載〉

二代主任司祭 ルイジ・ソレッタ神父(1963－1972年)

12月3日より待降節が始まります。待降節は主イエズス・キリストの御降誕の日を待つ季節です。今年は、私達の教会では、特別のクリスマスの行事が行なわれます。それは、第二回市民クリスマスに参加することです。富士吉田の連合のクリスマスに誘われて、喜んで皆様と一緒に協力したいと思って居ります。

市民クリスマスは、プロテスタントとカトリック信者とが心を合わせて、市民に主イエズス・キリストを知らせるために大きな意味があると思います。又、教会一致の一つの小さな手段でもあります。皆様は、大勢のお友達と親せきの人々を誘って参加してくださいませよう願ひいたします。

つづいて、この十二月よりヨセフ・ピアチーニ師が助任司祭として富士吉田の教会に任命されることになりました。長いこと司祭が一人だった私達教会にも四年ぶりで二人の神父様が聖務を取ることができるようになって皆様と一緒に喜びたいと思います。

〈以上 富士吉田カトリック教会月報 1967年2月号より転載〉

1972(昭和47)年8月、山梨県・忍野村に東京八王子市の甲の原から移転してきた、精薄者・児童の施設、富士聖ヨハネ学園が落成し、荒井司教の手によって祝別式が行なわれた。この施設は、東京都の補助もあって、施設利用対象者は東京都下に限られていたため、現地の山梨県側との間に問題もあったが、関係者の重なる協議もあって全国各地の教会関係者を始め、カリタス・ジャパンからも援助を受けて開設された。

〈以上 1988年5月刊 横浜教区設立50周年記念誌より転載〉

三代主任司祭 ブイルジニオ・チェリツァ神父(1973－1992年)

「神のおとずれ」

12月といいますと今年も終わりという、あわただしい気持ちで一年間のことを省みて、今年のいろいろの出来事について自然に反省するようになって来ます。良かったこと、悪かったこと、嬉しかったこと、悲しかったことなど、皆さんにいっぱいあったと思います。これ等のことに対して世間的な判断よりも、信仰の目で見ると、どんな出来事の中に神のおとずれを探し求めるかが信者としては大事なことです。

「雲が西におこると、あなた達はすぐ雨になるという。その通りだ。南東の風が吹くと暑くなるだろうという。そのとおりになる…では、なぜあなた達は天地の気配を見分けるのに今の時代を見分けな





いのか。なぜ何が正しいかを自分で判断しないのか。」〈ルカ12章54～57〉と、イエズスがその当時の人々を、いましめて下さったように、私達もイエズス様からいわれないように、時のしるしを見分け、その中で神の愛の導きと、その訪れをみとめるのは本当です。幸せな時に神の愛を求め、神のおん恵みだというのはやさしいですが、不幸な場合にも、神が私達の生活から消えてしまったように悲しくなる時に、神のおとずれ、その愛のしるしだといって、その試練も素直な心で受け取るのは、信仰がなければたしかにむずかしいことです。

よく考えますと、今年も、どんな場合があったとしても無事に終わりそうなのは、何よりも神様のおかげで、感謝すべきではないでしょうか。やはりすべてのことに神のおとずれを見るのは、安心できるだけでなく、すべてがお恵みとなって、そこに幸せがあるのです。

〈以上 1990年12月 おとずれ 118号より転載〉

四代主任司祭 ロレンツォ・マネルバ神父(1992－1994年)

「神に感謝」

去る、七月末、永い間、待ち望んでいた教会墓地が完成いたしました。

河口湖を見下ろす小高い丘の上、緑に囲まれた霊園を訪れる人々を黒く光る美しい十字架が見守っています。約30年という長い間、探し求めていた墓地、その間候補に上がった土地は、何十カ所にも及びます。おとずれの紙面をお借りして、司教様はじめ、チェリッツァ神父様、ミラノ外国宣教会の神父様方、教会の信者さんに心から感謝いたします。墓地には一日も遅く入ることを願いながら、一日も早い完成を夢見たのも、十字架を通して、教会という存在を世に示しつつ、凡ての人々が、一つになることを願う神様のみ旨に違いありません。

『父よ、あなたが私たちの内におられ、私があなたのうちにいるように、すべての人をひとつにしてください。彼らも私たちのうちにいるようにしてください。そうすれば世は、あなたが私をおつかわしになったことを信じるようになります』(ヨハネ17:20～21)

『私は復活であり命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きて、私を信じる者は誰も決して



死ぬことはない』(ヨハネ 11:25～26)

墓地祝別式でもこの聖書のみ言葉が読まれ、他の宗教者の墓の上にも、この主のみ言葉が響き渡りました。

教会墓地に建てられた大きな十字架は、通りかかる人々に、絶えず復活の事実を考えさせます。みなさん、寺が管理する一般公園墓地の中に建てられた教会墓地ですから、墓地を美しく保ち、福音の精神にしたがって、より一層、各自の信仰に沿った思いやり、優しさを故人に対して表す必要があります。天に召された兄弟・姉妹に会う日まで地上で、彼等のご保護を願い、キリストの模範に倣って迷わず信仰の道を歩み続けましょう。

〈以上 1992年9月 おとずれ 139号より転載〉



(上) マネルバ神父とチェリツザ神父 (下) 30周年記念ミサ 小き花幼稚園リズムホールにて



五代主任司祭 アルフレット・スカットロン神父(1994－1995年)

「四旬節を迎えて」



1日から四旬節が始まります。今月いっぱいそして4月15日まで、日曜日を除いて平日を数えますと、ちょうど40日という数字が出てきます。長い伝統を通して定められた数字です。

教会の歴史を見ますと、四旬節は初め、洗礼志願者が洗礼を受ける前の最後の準備の期間でした。

こうして信仰の基礎をしっかりと築くときでした。その後教会から離れた人々を教会にもう一度受け入れるための償いを行なう時になりました。その後すべての信者のために、毎年信仰生活を改める機会として定められました。一年中教会は教えの中心として、神の愛、イエズスの生涯、聖霊の働きを

強調しますので、それに答えて一人一人道徳的態度、日常生活の質を考え直すために特別な期間が定められました。今日の四旬節も同じ目的を持っています。

この数字は聖書のいろいろな出来事に関連していますのでその出来事を思い出すことによって四旬節の意味が現れます。ノアの時代、神の罰としての雨が「四十日四十夜地上に降り続いた」奴隷の国から出て、約束の国に入る前に、神の民が40日間荒れ野に過ごし、その間のモーセは立法を受けるため「四十日四十夜山にいた」迫害されたエリヤは神の山に着くまで「四十日四十夜歩き続けた」洗礼の後、誘惑を受ける前にイエス様も「四十日間、昼も夜も断食した、と聖書にあります。

数字に基づいて引用されたこの古い出来事は四旬節の訓練の基礎になりますが、このために今年、我々のうちにあった地震のことを見過ごしてはならないと思います。この2月、破壊された神戸を歩きながら、イエズス様の言葉を考えていました。「・・・悔い改めなければ・・・」瓦礫の中や貿易で賑やかであった三ノ宮の無常の建物の前で、その言葉の意味は明らかになります。

我々現代人は科学の発展、計算の精密化、財力、仕事の成功などを完全に信頼しているのではないか。実際はそこに、これらの空しさを目で確かめる事ができます。必死に働いて積んだ財産を失った人々の無力な表情を見るだけで違うことを求めて生きるべきことは明らかです。私はどこに信頼を置くのでしょうか、何を求めて今生きているのでしょうか。四旬節は祈りへの呼びかけを通して、神の前に人間いすぎない私たちの立場をはっきりとさせ、節制を通して物の価値、また物との関係を考えます。悔い改めるとは人生の舵を人間、あるいは物から神へ向けるものだと思います。

〈以上 1995年3月 おとずれ 169号より転載〉

六代主任司祭 マリオ・ビアンキン神父(1995－2002年)

「ご復活おめでとう」

花が咲く春の季節と共に、主の死と復活の時も訪れて来ます。新しい命の訪れの喜びを申し上げます。使徒パウロは次のように書かれています。

「信仰と、希望と愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。愛を追い求めなさい。」「愛は決して滅びない」(1コリント13章12節・8節)

滅びないものとはどんなものでしょう。どこにあるのでしょうか。金、ダイヤモンドなどが永遠だといえれば人間は無理をしてもそれを必ず探し出し、取り出し、手に入れるまでやめないでしょう。イエズス様はこのような宝に神の国を例えられました。

「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人はそのまま隠しておき喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を一つ見つけると、出かけていって持ち物をすべて売り払い、それを買う。(マタイ13章44節～46)この宝、この真珠は愛です。それは「神の愛だからです。」(1ヨハネ4章8節)

でも、愛とはどんなものでしょう。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」と使徒ヨハネが書かれました。それから次のように続きます。「愛する者たち、神がこのように私たちを愛されたのですから、私たちも互いに愛し合うべきです。」(1ヨハネ4章10節・11節)

愛は自分を捧げる自由です。主イエズス・キリストの愛を信じることによって頂く自由です。夫婦愛、親子の愛…隣人愛、人々の間のどんな関係でも愛にもとづいた関係であるようにと神様が求めておられます。愛する形、方法が異なっても愛は変わらない。愛はいつも同じものです。神のいのちであるからです。それから愛する事は必ず死と復活に導くものです。存在するものが全部新しく創造されなければならないからです。「見よ、わたしは万物を新しくする」(ヨハネの黙示録21章5節)愛は地上の唯一の宝です。そのおかげで私たちは天のいのちに属し始めているからです。愛はみんなの手元にあるもので、みんなに与えられている神の贈り物です。

愛は永遠に至る宝物です。主イエズス・キリストの死と復活を記念するにあたって その愛の訪れの上の喜びを申し上げます。本当におめでとうございます。

〈以上 おとずれ 1998年4月 206号より転載〉



七代主任司祭 細井 保路神父(2002－2005年)

「喜びが生まれる場所」

五月はマリア様の月です。マリア様の姿の素晴らしいところは、いつも、神様の言葉に耳を傾けていたという点です。よく耳を澄ますなら、私達の耳元でも、聖霊のささやきが聞こえるはずですよ。

聖霊は「弁護者」だとイエス様は言われました。「なぜそれをするのですか？」と聞かれたときに「愛の為に」と答えてくれる方だということです。

私達の言葉や行いには動機がありますが、それは、愛の為、相手を生かす為であるはずなのに、時として、自分本位の欲望や怒りが、動機になってしまうことがあります。聖霊の声を聞くならば、私達の動機を絶えず良いものにすることが出来るのです。そうすれば、神様から溢れるほどにいただく恵みをしっかりと受け止め、それをまた人に伝えていくことが出来ます。

お互いに相手を生かす存在になることが出来れば、一緒にいることが嬉しいという事こそが、一致の霊である聖霊が働いておられる印なのです。

現実の生活は必ずしも幸せな人間関係だけで成り立っているものではありません。でもそれを、喜びが生まれてくるような関係に変えていく事が大切なのだと思います。

これからも教会が喜びの生まれ出る場所でありますように。

〈以上 2002年 おとずれ聖霊臨時号 241号より転載〉



八代主任司祭 ジョルジョ・フェラーラ神父(2003－2005年)

「証」

最近、社会には事件が益々多くなりました。事件が増えてしまった事と、エゴイズムと関係があるかもしれないと思っています。私達の周りには自己中心的な人も多いです。社会の中で人を自分の思い通りにしか、しない人も沢山います。私にもわがままなところがあります。ですから、「イエス様、あなたの証が出来るように私に優しい心を送って下さい。証明が出来るようにわがままな生活から私を遠ざけてください。」と祈っています。

皆さん、わがままになるのは、疲れているのも原因の事があると思いませんか？ 最近、蒸し暑いし、とても忙しいでしょう？ 聖堂で何もしないで、あるいは、ロザリオを唱えながらに座って、神様



からの愛の癒しを頂くことをお勧めします。司祭や信者等が聖堂で静かに神様と交わっている姿を、道行く人が偶然見かけるだけでも、宣教になると思います。私達一人一人が神様から離れず、神様と共に生き、証となる生活をして行けば、良い社会が、思いやりのある人や心優しい社会が出来るはずで。そして、ご家族やご友人や知人の方をお御堂迄お招きしましょう。

「神よ、『人々に証明しなさい』というこの言葉が、私を通して実現するように、私をあなたの道具にしてください。」と祈りながら。

〈以上 2004年7月 おとずれ 263号より転載〉

九代主任司祭 林 大樹神父(2005－2010)

「父なる神の愛」

私たちは、例えば職場において、取替えが可能な存在です。自分がいなくてもその会社は存続します。では、父親〈母親〉の愛はどうでしょうか？ 例えば、3人の子どもがいる父親、又は母親がいるとします。3人目の子どもを亡くしました。その父親〈母親〉は他に2人いるから、1人亡くしても良いというのでしょうか？

このように、「父なる神」は私たち一人一人を取替えの利かない存在として愛して下さいます。「あなた方も聞いている通り『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。

しかし、私は言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者の為に祈りなさい。あなた方の天の父の子となる為である。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせて下さるからである。」

「父なる神の愛」は、キリスト信者だけに注がれるものではありません。敵をも愛します。信者であろうと、信者でなかりと、「父なる神」はすべての人間一人一人を愛しています。イエスのメッセージは、人間一人一人を愛しています。イエスのメッセージは、人間一人一人は「父なる神」から愛されている掛け替えのない存在であり、こんなに一人一人を愛して下さる「父なる神」に伝えてください、という事です。

〈以上 2008年6月 おとずれ 310号より〉



十代主任司祭 森田 満義神父(2011－2019年)

「忍耐と優しさ」

国家や民族間での戦争、最近のテロ、暴力、弱い者への虐待などは有史以来様々な形で絶えず続いてきました。21世紀は平和な時代をと祈ってきましたが、その願いも空しく、テロリズムという形の恐ろしい戦争で始まってしまいました。少なくともわたしたちの周りの家庭、学校、職場は神の平和が実践されているのかと思うのですが現実は違うようです。争いはいろいろな原因によりますが、最近、やや複雑な出来事に出会いました。それは職場のことです。ある研修会が4日後に迫り、係りの部署と打ち合わせし、準備していた時のことです。後援者の謝礼と交通費が多額だったので、「十万円以上の場合には2週間前から出費の依頼をせよ！との決まりがあるのに何事だ」とヒステリックに怒鳴られ、しかられてしまったのです。そのような取り決めなどすっかり忘れていたことと、研修会の準備が遅かったこともあって「本当に申し訳ありません。御免なさい。」と謝ったのですが、「ここはいつも謝れば済むと思っているが、社会ではそんなわけにいかない！」と、また、怒鳴られました。しかし反論したい！

社会的な決まり、規則は守るべきであるが、それが人によって人を傷つけるものであってはならない。決まりを守らなかった人を感情あrawな言葉で叱り、傷つけることはおかしい。人間的な暖かい世界でもないし、まして信仰を一つにして働いている職場においては考えものである。寧ろ、決まりを守れなかった人には忍耐をもって優しく諭す事が出来なかったのでしょうか。戦争、テロ、虐待などの多い昨今、わたしたちは特に優しさと忍耐をもって日々の生活を過ごすように努めなければならない。

互いに忍び合い、赦し合うことを教えている聖書の言葉に耳を傾けよう。



富士山二合目のマリア像の前にて

「あなた方は神に選ばれ、聖なるものとされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたを赦して下さったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身につけなさい。愛は、全てを完成させるきずなです。」〈コロサイの信徒への手紙3・12～14〉

何度も何度も繰り返し読み、祈りたい言葉です。

〈以上 2017年8月 おとずれ 420号より転載〉

十一代主任司祭 内藤 聡神父(2019-2021年)

「諸聖人の日・死者の日」

11月ということでカトリック教会では死者の日を迎えています。富士吉田教会でも追悼ミサなどが行なわれますが、すでに天の永遠のすみかに招かれた方々のことを思い起こして祈るとともに、今、生きている私たちもいつか必ず地上の道のりを終えて、神が備えてくださっている天の国に招かれていることを改めて意識したいものであります。亡くなった人のために祈るということは、人間のごく自然な動きから出るものです。それは、すでに亡くなってしまった人たちも含めて、自分が他のすべての人とのつながりの中に生きているという本能的な自覚によるものだと思います。



2018年6月 堅信式にて

そこで、11月は1日の「諸聖人の祭日」から始まります。諸聖人とは、広い意味での聖人のことです。この世とあの世にいる、救われた全ての人のことを言います。そして、全ての人の救いの恵みは、救い主であるキリストから来ますし、キリストからしか来ません。洗礼を受けた人はこの世でキリストに結ばれ、洗礼を受けなかった人はその死の瞬間にキリストにつながれて救いの恵みを受け、聖人になるのです。

しかし、このつながりは、それぞれが一本の線でキリストに結ばれてあるのではなく、キリストを中心とした無数の線ですべての人があたかも網の目のように繋がって成り立っているのです。

もし私たちが天の国に入ったとしても、私たちが大切に思っている人、私たちが知っている人の誰か一人でも天の国に来ないとすれば、私たちは本当の意味での幸福ではないと思います。つまり、私たちとの関わりがある全ての人の救いがなければ、私たちの救いはないということになります。

つまり、私たちがキリストに結ばれて受ける救いの恵みは、私たちにつながれているすべての人々にも及んでいくということです。神のみもとにいる聖人たちは、神と人との唯一の仲介者イエス・キリストを通して、この地上の旅を続けている私たちのために執り成しをしてくださっています。こうして、私たちは自分でも気づかないうちに、聖人たちの執り成しによって、助けられています

聖人たちは、私たちの模範としてだけ存在しているわけではありません。諸聖人との交わりによって、私たちをキリストにより近くから従っていくようにと、キリストとより強く結び合わされるのです。そして、亡くなられた方々も、イエス・キリストの神秘体に属する人々です。教会は、その最初の時代から、死者の記念を行い、死者に尊敬を払ってきました。そして、亡くなられた方々にもし罪が残っていた

とするならば、彼らがその罪から解かれるように、祈ってきました。このような死者のための私たちの祈りは、死者を助けることになるのです。死者の月を迎えるにあたって、亡くなられた人のために祈り、また今を生きている私たち一人一人のためにも心を合わせて祈りを捧げてまいりたいと思います。

〈以上 2018年 11月 おとずれ 435号より転載〉

十二代主任司祭 千葉 俊一神父(2021—

「荒れ野の10余年」



洗礼式にて

わたしたちは未だコロナウイルスの渦中にあります。少なからぬ医療従事者たちは完全な収束は約10年を見えています。ウイルスの発生原因はいくつか考えることもできましようが、やはり開発・生産・消費に血道をあげてきた人間による地球環境の破壊、特に際限を知らぬ森林伐採によってそこに生息していたウイルスが人間の生活圏に移ってきたことを第一と考えるべきでしょう。つまり人間は他でもない自分の罪の結果に苦しんでいるのです。

この罪を認め真に回心しなければ、たとえCOVID-19を乗り越えたとしても、次々に現

れる新ウイルスによって人間は苦しみ続けることとなります。パンデミックとなって以降巷でよく口にされる「コロナとの闘い」とは、わたしたち人間の内なる悪、すなわち欲望との闘いを意味するはず

です。わたしたちはどこに向かっていこうとしているのか。わたしたちは単純にコロナ以前の生活に戻りたがっているのか。わたしたちがそれを考えるときイメージとして浮かんでくるのが、旧約聖書に描かれているイスラエルの民の荒れ野の旅なのです。エジプトにおいて奴隷状態に苦しむイスラエルの民は、モーセに導かれて脱出し、約束の地を目指して40年の旅を続けます。

この旅はイスラエルが真に神の民となるための浄化の期間でありました。わたしたちは「もっと多く、もっと速く、もっと快適に」という欲望の奴隷状態としての「エジプト」を抜け出し、支え合い ケアリングと分かち合いシェアリングによる全てのいのちの共生が実現する「約束の地」を目指して旅をしなければなりません。しかしそれは容易ではないでしょう。旅の間、イスラエルの民は神とモーセに反抗し続けます。彼らは自分たちが奴隷であったエジプトを、肉やパンや魚がふんだんに食べられたからと恋しがり、旅の不安から金の雄牛の鑄造を造り神とてあがめ踊り狂います。「飽食」と「感動」に惑わされ真の救いを拒む愚劣な民にモーセは怒り、悩み、苦しみます。最終的にイスラエルの民は約束の地に到着しますが、しかしモーセ自身は荒れ野における指導者としての不手際を神から問われて、約束の地に入れないうまま世を去るのです。

わたしたちの荒れ野の旅を導くのはモーセではなく、死んで復活したいのちの与え主イエス・キリ

ストです。主はともにおられる神として、どのようなときにもわたしたちに寄り添ってくださいます。荒れ野の10余年の旅を経てわたしたちは「約束の地」に到達できるでしょうか。世界と歴史を統べる神の愛は人間の愚かさをはるかに圧倒するとわたしは信じています。

(以上 2021年10月 おとずれ 470号より転載)

「おとずれ」前史

教会報「おとずれ」初号が発行されたのは、1981年2月。このとき、B4版のわら半紙を2つ折りにした6頁の会報には、「おたより」という表題がつけられていました。巻頭には当時の主任司祭、チェリツァ神父の“新しい月報”という記事が掲載されています。



「今月から私たちの月報は新しい着物を着て出版されることになりました。」と始まり、月報は教会の新聞として「教会の声やニュースを運び、信者同志の親睦をはかるもの」と述べられています。

それまでの教会報は、心のともしび運動本部が発行する月刊の機関誌「心のともしび」(B5版4頁)の最後の白紙のページを利用して、その月の行事と主任司祭やシスター、信徒の言葉を掲載していました。教会に保存されている月報は、1967(昭和42)年1月から1981(昭和56)年1月

まで15年

にわたり、そのほとんどを堀内広代さん(1961年受洗、2004年帰天)が端正な文字で手書きしています。教会のすぐ近くに住まわれていた堀内さんは、毎朝、御聖堂の扉の鍵を開け、お祈りを捧げるのを日課とされる熱心な信者さんでした。

「おたより」編集後記には、バザーの売上金で購入した印刷機で「会報」が印刷できるようになったと記されており、これを機に5人から成る編集委員会(北川さん、吉田さん、小松さん、葉山さん、川合さん)が誕生しました。

「おたより」に続く第2号では表題が空欄となっており、会報の名前が募集されました。多くの応募の中から小林華壽美さん(1954年受洗、2021年帰天)の案が選ばれ、4月発行の第3号から「おとずれ」として発行されることになりました。

折しもこの年の2月下旬にはローマ教皇が初めて日本を“おとずれ”、この号はヨハネ・パウロ2世来日特集号となり、教皇ミサ、ヤング&ホープの集いの体験談が多数掲載されています。

以来「おとずれ」は43年にわたり発行を続け、この4月で500号を迎えました。



おとずれ 500 号発行記念あいさつ

編集委員長・新井静香

おとずれ 500 号発行記念誌を刊行することでメンバーを募り、5 名の編集員が集まりました。編集会議において栗原さんが出された内容をもって、記念誌の製作がスタートしました。

おとずれ初号(1981 年(昭和 56 年)2 月号)より全巻の歴代神父様の文章を各委員(下段)で割り振りして、その抜粋を掲載することにしました。大変な作業でしたが、皆さん期日を守り提出してくださいました。

次の作業は、栗原さんがパソコン入力、図版挿入全般にかかわり、当初計画の通り 2 月には全員の作業の確認を終えました。そして最後の仕上げに、若い小佐野さんにデザインに加わっていただけたことは、たいへん心強いことでした。

おとずれを読み返してみると、いろいろなことが思い出され、富士吉田教会の歴史を見るようでした。とても良い機会をいただいたと思います。

最後に編集に関わった方々、ご協力いただいた方々には、とても感謝しています。ありがとうございました。

おとずれ発行 500 号記念特集号編集委員会

委員長 新井 静香(教会副委員長)

リーダー 栗原今朝夫(編集総括 初代、二代、三代担当)

委員 小松二三子(四代、五代、六代担当)

委員 新井 静香(七代、八代、九代担当)

委員 宮本 二郎(十代、十一代、十二代担当)

委員 小林恵美子(おとずれ前史担当)

デザイン 小佐野真彩



お知らせ

しきょうじょかいしきょうじょかい しゅうねん 司教叙階司教叙階 25周年

うめむらまさひろしきょうさま れいてきはなたば ラファエル 梅村 昌弘 司教様に 霊的花束を

ラファエル 梅村 昌弘 司教様は、1999年5月15日に司教に叙階され、今年で25周年を迎えられます。横浜教区一粒会本部委員会の席で横浜教区16地区からお祝いの言葉と霊的花束をお贈りすることになりました。

(霊的花束とは、祈りを花に見立てた、「祈りの花束」のことです。)

山梨地区では、一粒会担当司祭のチャン神父様(韮崎教会)と話し合い、下記の要領で実施することとなりました(山梨地区としての期限 4/14)。

- ① 各教会にて霊的花束を行い、集計を一粒会委員に集約。
- ② 各教会委員長から一言メッセージを送る。
- ③ 各教会学校の子ども達から司教様へのメッセージを送る。

聖堂に「祈りの花束」用紙(右図)と箱を準備致します。
4月7日までにご記入の上、投函頂ければ幸いです。



司教叙階25周年 ラファエル梅村昌弘司教様に霊的花束を	
主の祈り	☐
アヴェ・マリアの祈り	☐
ロザリオの祈り	☐
小さな犠牲	☐
小さな善行	☐

3月信徒の集い

2024.3.3 参加者 14 名

1. 【新年度教会委員人事】 教会委員長の引き受け手が見つからないため、教会委員長・教会副委員長という枠組みに代えて「共同代表」複数名を置き、この人たちが教会委員会を代表して信徒たちに対応し、また富士吉田教会全信徒を代表して教会外部に対応することとする。今年度は以下の4名:新井静香・江守香代子・小林恵美子・曾根美香(あいうえお順)
2. 【富士吉田教会の教会運営】 カトリック教会においては小教区共同体の唯一の意思決定機関は主任司祭が主催する教会委員会。富士吉田教会の「信徒の集い」は議決機関ではなく、主任司祭および教会委員会が信徒たちと様々な案件に関する説明・質問・意見を交わすコミュニケーションの場であることを理解していただきたい。
3. 【2023年度会計報告】 先月の説明が十分ではなかったため再度報告。(江守)
4. 【復活祭パーティ】卵 10 個各自持ち寄り。差し入れは事前に角さん(婦人部)に申し出てほしい。
5. 【書棚・書籍等の処分と本棚製作】 本はリスト作成中。コピー室で1年間貸し出し、様子を見て検討。
6. 【おとずれ500号及び70周年記念誌】 おとずれは 3/14 打合せ、3/24 製版 120部作製予定。「70周年記念誌」作製は4月24日(水)に開始して9月発行予定。
7. 【富士吉田教会 HP 担当者進捗状況】 佐々木さんのご協力を得る運びとなった。
8. 【既存の教会パンフレットの改定の報告】 既存のパンフレットを修正して100部作製した。
9. 【教会墓地管理費大幅値上げの対応】
 - ・今後、教会の共同墓地の利用希望者を把握したい。墓地規約を明示してアンケートを集める。

・佐藤さんが墓地規約をまとめて、アンケートを作る。

10.【その他】

- ・フードバンク・フードサポートより。衣類は十分となったので遠慮して欲しい。
- ・黙想会の参加者が少ないのは問題。多くの方に参加していただく為に地区ラインで流す。

こよみ

4月

日付	教会暦	行事内容等	日曜学校	聖堂清掃/備考
4/7(日)	復活節第2主日 神のいつくしみの主日	日曜学校 始業式 宣教司牧・事前役員会@甲府	○	吉田・河口湖
4/13(土)	—	教会委員会	—	—
4/14(日)	復活節第3主日	信徒の集い	○	信徒の集い 参加者
4/21(日)	復活節第4主日	聖歌隊練習 宣教司牧委員会@甲府	○	聖歌隊
4/24(水)	—	70周年記念誌の話し合い	—	—
4/28(日)	復活節第5主日		×	吉田・河口湖 以外

御ミサは毎週日曜 9:30 開始です。変更ある場合のみ表に記載します。

イタリア語教室(月曜10時):4月1日、8日、15日、22日

5月の主な予定:

5/12(日)信徒の集い、5/19(日)聖母祭@山中修道院、5/25(土)地区懇談会@甲府

4月のミサ奉仕

日	先唱	第1朗読	第2朗読	香部屋
7	小林恵美子	和田 一郎	佐藤 光良	江守香代子
14	大野 隆	堀内 千鶴	吉村 希望	中村すみ子
21	曾根 美香	葉山 孝夫	山田 恵子	角 幸子
28	遠藤 伸子	宮本 二郎	加々美敦子	小林恵美子